

死の夢の王国

—『生の凱旋行列』と『うつろな人びと』—

上島 建吉

反ロマン主義の驍将、Shelley批判の元兇として知られた T.S. Eliot が後年になって態度を変え、Shelley を評価する傾向に転じたことは本誌第 5 号 (1991 月 12 月) で星野徹氏が論じておられる通りである。特に 'The Triumph of Life' に関しては当初から Eliot の評価が極めて高く、彼がこの詩のイメージや思想に少なからぬ関心を抱いていたことは明らかである。その隠れた影響と見ていいかどうか定かではないが、彼が 1925 年に書いた 'The Hollow Men' と Shelley の 'The Triumph of Life' との間に、表現上、内容上にわたって奇妙な類似が認められることを私は指摘したい。以下、引用箇所を示す行数のまえに E. とあるのは Eliot の 'The Hollow Men'、S. とあるのは Shelley の 'The Triumph of Life' を表わす。テキストはそれぞれ T.S. Eliot: Collected Poems 1906—1962 (Faber and Faber, 1963) および Donald H. Reiman et. al. ed.: Shelley's Poetry and Prose (Norton, 1977) に據った。

さて

We are the hollow men
We are the stuffed men
Leaning together
Headpiece filled with straw.

(E. 1—4)

で始まる Eliot の「はりぼて人形」の描写は
As in that trance of wondrous thought
I lay
This was the tenour of my waking
dream.

(S. 41—42)

で巻を開ける Shelley の幻想絵図と何の関係もないかに見える。しかし前者も夢うつつの語り手が

Waking alone

At the hour when we are
Trembling with tenderness

(E. 48—49)

した挙句の人間観察だとすれば、Shelley の描く「白昼夢」の光景と質において同じことになろう。両詩人とも現実を、死を背景とした夢の一部と見なす結果、Eliot は現世を

“death's dream kingdom” (E. 20)

と呼び、Shelley はそれを

“this valley of perpetual dream”

(S. 397)

と唱える。ともに根底には Dante の地獄絵があり、自己を見失って酔生夢死の生を送る群衆の狂態を、一方が静的に、また epigram 風に叙述するのに対し、他方は動的に、そして epic 風に語り始め、やがて同じように、酒濁した「生ける屍」の描写に至る。

Shape without form, shade without
colour,
paralysed force, gesture without
motion;

(E. 11—12)

Numerous as gnats upon the evening
gleam
All hastening onward, yet none seemed
to know
Whither he went, or whence he came,
or why
He made one of the multitude,
(S. 46—49)

“From every firmest limb and fairest
face
The strength and freshness fell like dust,
and left

The action and the shape without the
grace
of life;

(S. 520—23)

こうした生き方を潔しとせず、真実を見据えて敢然と運命に立ち向かった「激烈な魂」を評価する点でも両者は共通している。

Those who have crossed
With direct eyes, to death's other
kingdom
Remember us—if at all—not as lost
Violent souls; but only
As the hollow men
The stuffed men. (E. 13—18)

All but the sacred few who could
not tame
Their spirits to the Conqueror, but
as soon
As they had touched the world with
living flame
Fled back like eagles to their native
noon,

(S. 128—31)

しかしこれらの「聖なる少数者」が人生との闘いに勝利を収めたわけでは決してない。EliotにあってはGuy Fawkesが、ShelleyにあってはRousseauがそうした「激烈な魂」の代表と考えられるが、どちらもその志を達することはできなかった。Gunpowder Plotで議会をドカンと吹き飛ばすはずだったGuy Fawkesは、陰謀が発覚して官憲に捕えられ、しおしおと死んだ。

This is the way the world ends
Not with a bang but a whimper.

(E. 97—98)

この言葉は、他の何ものにも屈せず、ただ自身の情欲のみに負けた結果は「ねじまがった古木の根」(S. 181—82)のような形骸に成り果てた'Rousseauにも当てはまるであろう。ただRousseauにとって唯一の慰めは

“If I have been extinguished, yet
there rise
A thousand beacons from the spark I

bore.”

(S. 207—8)

という、いかにもShelley的な信念であるが、これはGuy Fawkes Dayで寄付を集めてまわる子どもたちのせりふ

A penny for the Old Guy

(E. opening epigraph)

と対照的である。

では「死の夢の王国」に救いの兆はないものであろうか。Danteを煉獄から導き出したBeatriceの目は、「うつろな人びと」の世界には現れないとEliotは言う。ただ存在を予感させるだけで、見えそうで見えないその「目」を描写する詩句は、まるでShelleyが書いたかのような印象を与える。

There, the eyes are
Sunlight on a broken column
There, is a tree swinging
And voices are
In the wind's singing
More distant and more solemn
Than a fading star.

(E. 21—28)

当のShelleyも同じように、現世における救いの可能性を否定する。Rousseauの語るところによれば、「人生の車」(“[Life's] cold bright car”, S. 434) がざらざらする光で一切を眩惑する荒野では、かつて彼を至福の園に導いた「光充つる姿」(“Shape all light”, S. 352) もその光をなかば掻き消され、「永遠に失われた」ものとして、かすかに存在を知られるだけなのである。

“So knew I in that light's severe
excess
The presence of that shape which on
.the stream
Moved, as I moved along the wilder
ness,

“More dimly than a day appearing
dream,
The ghost of a forgotten form
of sleep,
A light from Heaven whose half

extinguished beam
“Through the sick day in which we
wake to weep
Glimmers, forever sought, forever lost.
(S. 424—31)

それにしてもこの「天来の光」あるいは「光
充つる姿」とは、Shelleyが‘Alastor’以来追
い求めてきた理想美の系列に連なるものであ
り、‘Prometheus Unbound’ではAsiaの姿を借
りて世界と人類を悪の暴虐から救う愛の原理
となり、‘Adonais’では“white radiance of
Eternity” (463) として現世の彼方にある絶
対的真実の証しとなったものである。そのほ
かShelleyのあらゆる探究詩篇、革命詩篇の中
心であり原動力であったはずのこの理想美が、
最後の作品に限って「人生の光」に圧倒され、
文字通り見る影もなくなったままにされるの
はなぜか。「冬来たりなば春遠からじ」と豪語
した Shelley はどこへ行ったのだろうか。この
問題は別な機会に論ずることにして、とにかく
「‘The Triumph of Life’はそれまでの
Shelleyの全作品を無に帰せしめる」と Paul
de Man が言う (The Rhetoric of Roman-
ticism, 1984. p. 120) のももっともである。
美神渴仰のパラドックスに気づき、「病める日
に目覚めて泣く」Shelleyは、改宗前の Eliot
のように、荒野の折りの空しさをどこかで感
じていたのかも知れない。

Lips that would kiss
Form prayers to broken stone.
(E. 50—51)
Till that eclipse, still hanging under
Heaven,
Was worshiped by the world……
For the true Sun it quenched.
(S. 290—92)

ともあれ ‘The Triumph of Life’が断片に終
ったという偶然は、現に書かれた内容以上の
意味をこの作品に与えている。この詩の後半
が欠けていることは、あらゆる読みを不可能
にし、同時に可能にする。一つ確かなことは、
この断片には語り手自身の幻想と Rousseauの
幻想とが入れ子細工になっていて、どちらか
ら同じ質問が顔を出すことである。

“Whence camest thou and whither
goest thou?
How did thy course begin”, I said,
“and why? (S. 296—27)
Shew whence I came, and where I
am, and why--
(S. 398)

そしてどちらにも解答が与えられぬまま最後に
“Then, what is Life?” I said…
(S. 544)

となり、その時点で作者とともにすべての幻
想が断たれる。

要するにこういうことではなかろうか。現
世を“perpetual dream”の谷 (S. 397)と見
る以上、そこでは同じ幻想と質問がperpetual
motionよろしく「永久」に繰り返されて
も不思議ではない。しかしこの永遠の堂々め
ぐりも何かのはずみで突然中断されれば、
tangentの方向にまったく別な動きが生じ、新
たな夢が展開しないとも限らない。そうした
通常の創作では起こり得ぬことがこのテキス
トでは起こった。古いロマン主義の袋小路に
陥ったShelleyは、図らずもこの詩を中断され
ることによって、新たなロマン主義への道を
後世に拓いたのである。

そう言えばEliotも ‘The Hollow Men’の
なかで詩行を意図的に中断している。

For Thine is
Life is
For Thine is the (E. 92—94)

彼としてはそれによって、祈る言葉さえ途中
で立ち消えになってしまう「うつろな人びと」
の現実を表わしたかったのであろう。しかし
われわれはこの断ち切られた主の祈りの余白
から、そうした現実を越えた、何か別なもの
の気配を感じないだろうか。それはShelleyの
最後の疑問文から受けるものに似た啓示可能
性の予感であり、その後のEliotの作品や思想
を知る者にはすぐ払いのけられる妄想である。
もしEliotがこの詩を書いた直後に世を去って
いたら、それまでの数かずの評論にもかかわ
らず、彼は今世紀の隠れロマン派の一人とし
て、今とは違った評価を得ていたかも知れない。
(岐阜女子大学教授)